

〔昭和七年 第十回春陽展・大阪展〕

(I)

・第十回春陽展 大阪展 六月八日〜十四日 白木屋呉服展／大阪毎日新聞  
社主催

(大阪毎日新聞 社告 六月七日)

八日から十四日まで

春陽會 第十回展覽會 会場・大阪白木屋七階

現代わが洋画壇の権威として確然たる存在の春陽會は、本年十周年を迎へ三百卅一点の入選を決定、四月下旬から五月中旬にかけて東都に展覧し、斯界の注目をひいたが、関西における展覧會をいよ／＼八日から十四日まで大阪白木屋に開き美術愛好家の鑑賞を仰ぐこととなつた。多数の來觀を望む。(入場料五十錢)

春陽會展・けふから 第一日すでに盛況

本社主催、春陽會第十回展覽會は八日から堺筋白木屋七階で初日の幕を開けたが、当日は折柄の好晴に午後二時までの入場者約五百名、厳選の二百卅七点を鑑賞した。同展覽會は十四日までであるが、なほ本社の主催で十一日午後七時から春陽會講演會が本社講堂で開かれ、十二日午前九時から午後四時までは春陽會員を中心とする「日曜畫家の會」を、午後六時から春陽會員と「日曜畫家の會」懇親會を甲子園ホテルで行ふことになつてゐる。(写真は初日の会場)



春陽會展・けふから  
第一日すでに盛況

本社主催、春陽會第十回展覽會は八日から堺筋白木屋七階で初日の幕を開けたが、当日は折柄の好晴に午後二時半までの入場者約五百名、厳選の二百卅七点を鑑賞した、同展覽會は十四日までであるが、なほ本社の主催で十一日午後七

時からは春陽會講演會が本社講堂で開かれ、十二日午前九時から午後四時までは春陽會員を中心とする「日曜畫家の會」を、午後六時から春陽會員と「日曜畫家の會」懇親會を甲子園ホテルで行ふことになつてゐる(写真は初日の会場)

(大阪毎日新聞 社告 六月七日)

**美術に関する講演会** (来聴随意)

十一日午後七時 本社講堂で

本社主催春陽会第十回展覽会が大坂白木屋で開催中、春陽会員諸氏が多数来阪されるのを機会に、本社は次の三つの講演会開きます。

洋画未来記 裕 伊之助氏

画人の生活 小林徳三郎氏

写生地とところどころ 田中善之助氏

現代フランス画壇の思潮 小山 敬三氏

\*

「日曜画家の会」  
パンツル・ダイヤモンド 十二日 甲子園ホテルで

美術の国フランスに於るパンツル・ダイヤモンド(日曜画家)の風景を日本に移し植ゑようとする本社の「日曜画家の会」はこれで第三回目です。当日は次の春陽会員諸氏並に近畿在住の諸大家が奮つてその指導の任に当り、自由に批評して下さるはずです。アマチュア画家並びに洋画鑑賞家の参会を望みます。

日時 十二日(午前九時から午後四時まで)

場所 甲子園ホテル

会費 一圓五十錢―昼食、茶菓付―

申込所 △大阪本社事業部、△心斎橋八幡筋 河内洋画材料店、△心斎橋 文房堂、△京都河原町 蛸薬師 山本画箋堂、△神戸元町 文華堂。

**春陽会出席指導者** 足立源一郎氏、裕伊之助氏、木村莊八氏、鬼頭甕二郎氏、小山敬三氏、小林徳三郎氏、森田恒友氏、中川一政氏、田中善之助氏。

春陽会を中心とする懇親会

なほ十二日午後六時から甲子園ホテルで引続き春陽会員を中心とする懇親会を開きます。多数御参会を希望します。(会費一圓五十錢、申込受付「日曜画家の会」と同じです。)

(大阪毎日新聞 報道 六月十三日)

緑の蔭に：彩管三昧

甲子園ホテルで 日曜画家の会



本社主催、第三回「パレット・ディメンション日曜画家の会」は十二日午前九時から甲子園ホテルで行はれ初夏の日曜をカンヴァスに向つて芸術三昧に浸ろうといふアマチ

ユア男女画家八十名参集、春陽会員ならびに近畿在住諸大家の懇切な指導で、ダンス・パレスのダンサーをモデルに、ホール内のコスチューム、人物、静物、或は庭園の風景に、それ〴〵得意の彩管を揮ひ、午後四時出来上がった所をホール内に持寄つて諸大家の批評を仰ぎ、多大の収穫を得て散会、引続き午後六時から春陽会員を中心に懇親会が催され、本社より城戸専務も出席、芸術談に花咲かせて同九時盛会裏に散会した。

(春陽会第十回展覧会 大阪展) 評 (II)

『大阪今日新聞』 昭和七年六月十二日

美術批評

春陽会寸評

光末 正人

六月八日より十四日まで堺筋白木屋にて開催中の春陽会展を観る。

春陽会の持つ近代的明快なムードは一步一步理想の楽園に達しつつある事が今回展で正しく観取された。全体としては東洋味のある事と純な楽しさと渋味のある事が特徴で、因習に囚はれず表現形式にも極めて変化の多い、各種の作品を網羅した事は面白い現象と思ふ。記憶に残った作品に就いてメモをとってみた。

倉田三郎氏の《栗の須風景》は色感の明快な風景画家としての肩の凝らない葉づれの音のリズムを写す情緒の人の観がある。追究の人より味ひ楽しむ人に近い感がある。自然観照の深み理法の洞察と表現は見逃す事は出来ない。小穴隆一氏の《裸婦》は暖色系統の色彩に関する鋭い感受性を示してゐるが、従来見受けられたぼや／＼した感がとれない様だ。

小山敬三氏の《海濱祭日》は大作だが毎年見る氏の作の中では今年のは一番力作として上げうべきだ。此の大作では色感の全体としての調和を一義的に見過ぎたために、コンポジションよりくる緊密さが乏しく弱い感

じを受けるのが残念だ。



小山敬三《海濱祭日》

長谷川昇氏の《S嬢》はコンポジションもよく、強いイムパルシヴ(衝動的)な筆致で爽やかに描写され堅実な筆致と精神が合致してよい効果を上げてゐる。

田川勤次氏の《公園曇り日》は秀抜な自然模写をモットとして色感が魅惑だ。

小杉放庵氏の《呉牛》は純南画的な伝統から離れたやうな感があり渾然として水墨の調子がよくこなされてあるのは正に氏の聡明を語るものである。水谷浩司氏の《緑蔭の女》、青木申四郎氏の《早春》は上ぐべきものだ。

石井鶴三氏の《人体クロッキー》等も小品ながら見ごたへのあるスケールのある大きいよい作品だ。